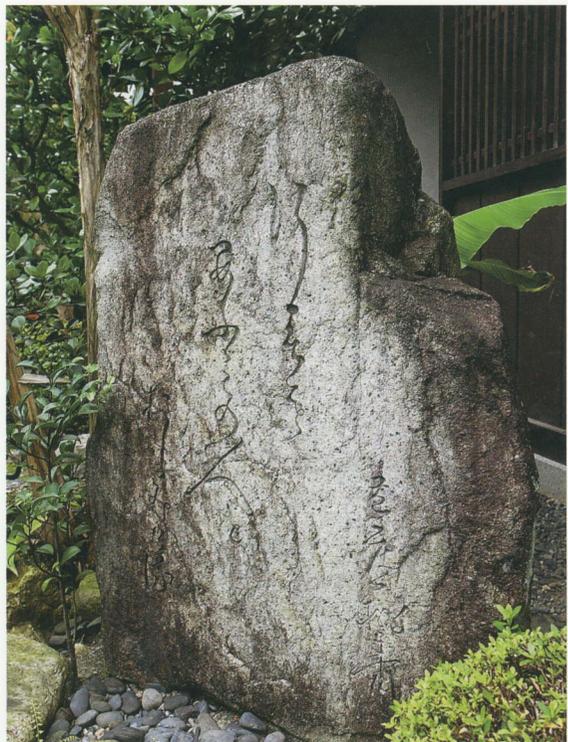


石に聴く ——芭蕉が愛した義仲寺

池田知隆（ジャーナリスト）



国指定史跡の義仲寺



行春を あふみの人と おしみける

〈行春^{ゆくはる}を あふみ（近江）の人と お
しみける〉

のどかな日の光にみちた春を近江の
人々と惜しむ松尾芭蕉（1644〜94
年）、48歳の句だ。旧東海道沿いの、静
かで古いたたずまいが残る大津市街の一
角にある「義仲寺」。境内に入ると、こ
の句を刻んだ石碑が迎えてくれる。

ここには、平氏打倒に立ち上がり、頼

朝よりも早く上洛し、平氏を西に追いや
りながらも、源範頼、義経の軍勢に敗れ、
近江で戦死した木曾義仲（1154〜84
年）が眠る。芭蕉はこの寺をこよなく愛
し、生涯に残した980ほどの句のうち
近江で詠んだものは89にのぼる。旅に生
き、大阪・南御堂で客死する直前にこう
遺言した。

「骸^{むら}は木曾塚に送るべし、ここは東西



芭蕉翁墓



「朝日將軍」と称された義仲の墓

の巷、さざ波きよき渚なれば、生前の契り深かりし所なり」

遺体は弟子たちによってこの寺に運ばれ、質素な自然石の墓が、義仲の墓と並んで建てられた。面には「芭蕉翁」の3字が刻まれている。

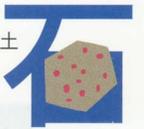
〈木曾殿と 背中合せの 寒さかな〉

ここで過ごす芭蕉を詠んだ伊勢の俳人、又玄の句碑も墓のそばにある。芭蕉は、

どうして義仲に強くひかれたのだろうか。

兵どもが夢の跡

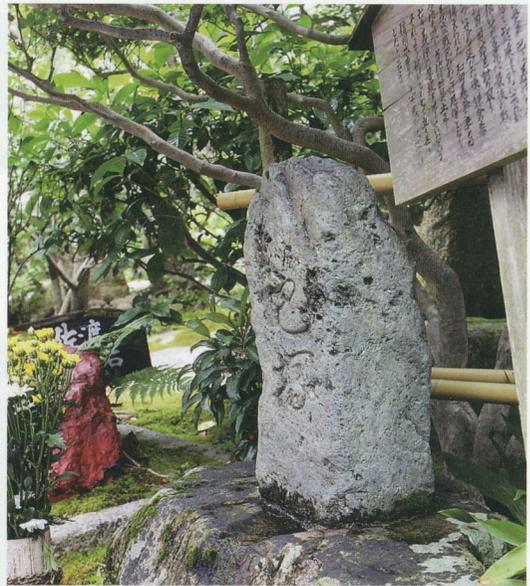
義仲は、夏の朝日のごとく昇り、秋の夕日のように沈んだ時代の寵児だった。義経軍に追われ、北陸へと逃れる途中、討ち死にした。平家物語では、義仲は最後、忠臣の今井兼平に「ここまで来たの



決して広くはない境内だが、四季を感じさせる草木が植えられている

はおまえと一緒に死ぬためだ」と語り、果てた。31歳だった。義仲の首は、京都に送られ、ここには胴体のみが葬られた。義仲をめぐる政治的悲劇、忠義心、情の深さに日本人の精神性を見たのだろうか。芭蕉は義仲の墓前で

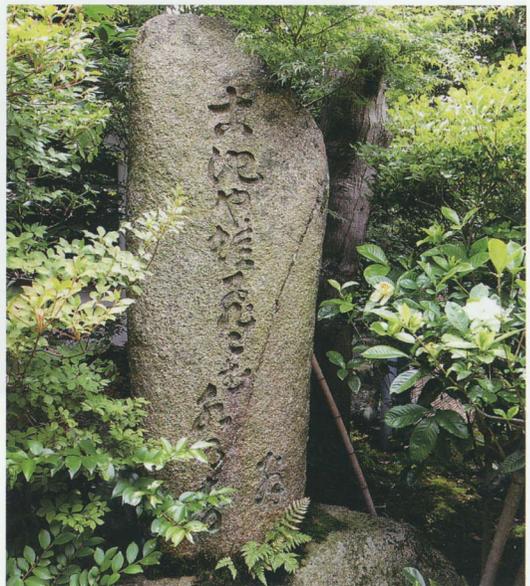
〈木曾の情 雪や生えぬく 春の草〉
と詠み、奥の細道の途中、
〈義仲の 寝覚めの山か 月悲し〉
の句を残した。



義仲の側室、巴御前の巴塚

石川県小松市の多太神社にある武将、斉藤実盛の甲から、幼い義仲の命を救った恩人、実盛とも戦わざるを得なかった義仲の心情を偲び、詠んだ句。

〈むざんやな 甲の下の きりぎりす〉
芭蕉は三重県伊賀で農民に近い下級武士の家に生まれた。関ヶ原の戦いから40年ちよっとしかたっていないころだ。すでに戦いの時代は終わり、武士の道を見限って俳諧に生きたが、武将に寄せる思



古池や蛙飛びむ水の音



義仲寺

大津市馬場1-5-12
電話:077-523-2811

《アクセス》
JR膳所駅下車、徒歩10分
京阪電鉄石山坂本線京阪膳所駅下車、徒歩10分
名神大津ICから5分

いは尽きなかったようだ。

奥州平泉で義経も31歳で散った。最後に勝った頼朝にしても、親子三代にして途絶えた。奥州で詠んだ

〈夏草や 兵どもが 夢の跡〉

と、最後の句

〈旅に病で 夢は枯野を かけ廻る〉

を重ねると、日本人の心情や無常観をめぐる芭蕉の思いがひしひしと伝わってくる。

石に聴く

庭を周遊していると、義仲の墓に寄り添うように小さな塚があった。義仲の死後、尼僧としてこの地に来て草庵を結び、供養の日々を送った義仲の側室、巴御前の「巴塚」だ。終始、無名を通したことから、草庵は「無名庵」と呼ばれ、これが義仲寺の始まりだという。

隅にひっそりと建てられた日本浪漫派の思想家、保田與重郎（1910～81年）の墓も見つけた。受付でもらった案内書にこの墓は記されていない。「保田の墓がどうしてここに」と執事の永井輝雄さ

んに聞くと、「実は、この寺がいまあるのは保田さんのおかげです」。

寺は何度も荒廃、再建の道を歩んできたが、最大の危機は1964（昭和39）年だった。別の寺院の末寺になり、荒れ放題になった末に売却されそうになったのだ。

「そのとき保田さんが尽力し、東京の篤志家の多額の寄金によって単立寺院として独立できました。ここに保田さんの分骨を納めています」

寺は1967年に国指定の史跡となった。保田は評論「日本の橋」で名も無い人々が築いた橋を通して日本人の美意識を論じたが、保田の墓を見て「無告」という古い漢語を思い出した。「告げ訴えて救いを求めるところのないこと」（広辞苑）との意味だが、ここには「無告」の民の系譜がしっかりと残されていた。

時折、鹿威しの音が響くこぢんまりとした庭に、義仲、芭蕉の墓とともに19もの句碑がある。それぞれの石に刻まれた文字からは、時を超え、古の日本人の喜び、悲しみの声が聞こえてくる。

近江から

2012.11 Vol.2
石



● 巻頭写真

● 今森光彦「石仏」

● 特集

● 「石」動かぬ歴史・風土

● 米どころ近江を作った花崗岩

● 天空の聖地——隠れ里の石仏群

● 野洲川枳岩の井

● 石に聴く——芭蕉が愛した義仲寺

● 嘉兵衛灯籠

● 白い鉱脈——長石採掘場をたずね

● 近江に在る石の信仰

● 琵琶湖水系のトンボ

● 詩「遊び」

● 連載

● 巖谷小波物語

● 美しい村の古文書

● ふるさことから

● 近江の生活人

● 琵琶湖をみつめる人々

Take Free

「近江から」第2号
2012年11月11日発行

編集・発行	特定非営利活動法人 たねや近江文庫 〒529-1303 滋賀県愛知郡愛荘町長野415番地 電話 0749-49-5932
編集・企画協力	株式会社 毎日新聞大阪センター 〒530-0001 大阪市北区梅田3-4-5 電話 06-6346-8734
編集協力	小坂育子
デザイン	株式会社 創知企画
カメラ	小林章夫
挿絵・裏表紙	松本 徹